

スクールカウンセラーに対する養護教諭の意識と評価

伊藤美奈子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題と目的】

養護教諭とスクールカウンセラー（以下SCと略記）は立場的にも共通点が多い。学校へのSC導入が制度化されようとしている今“養護教諭とSCの役割分業と協力体制の再構築”のためにも、養護教諭のニーズと評価を明らかにし、今後のSC制度の充実に向けて早急な対応が求められるといえよう。本研究では養護教諭とSCとの連携に焦点を当て、SC派遣校の養護教諭がSCに対してどのような評価をしているかについて検討する。

【方法】

調査時期 1998年11月。

調査対象 SC派遣校の養護教諭130名。

調査内容 ①SC制度の効果と問題に関する尺度：効果は<教師援助><子・親援助>、問題は<子どもの葛藤><教師の抵抗><実際の難しさ>からなる。4件法。②相談活動する際の困難感尺度：伊藤(1997)の一部を修正した16項目。<多忙><個人的迷い><学校としての制約>の3因子。4件法。③SCへの期待度・満足度：SC役割7項目に対し期待度と満足度を3件法で求める。この7項目得点は<子・親の面接><教師・親研修><養護の援助>に集約された。④SCとの連携スタイル：5選択肢から1つ選択。この5つは<協力体制>、<独立体制>に集約された。その満足度をの3件法で求めた。⑤SCと一緒にやっていくことへの自信（やれる・やりにくい）を2件法で尋ねた。

【結果と考察】

SCと「一緒にやれる」(自信群)と「やりにくい」(不安群)とを比較したところ期待度に差はなかった。一方、満足度の<養護への援助><教師・親研修>で自信群が($t=4.53, t=2.36$)、SCの問題<子どもの葛藤>では不安群の得点が高かった($t=2.82$)。また相談活動の困難感<個人的迷い><多忙><学校としての制約>で有意差および差の傾向が見られ($t=2.15, t=1.79, t=1.85$)、不安群の方が自分自身の相談活動の中で困難を抱えていることがわかる。養護教諭の協働への自信は、実際のSCに対する不満や否定的評価によるものであり、養護教諭自身が相談活動に悩んでいる場合も不安は大きい。

次に連携スタイルとそれに対する満足度で4群に分け、自信群と不安群の比率を比べたところ、独立-不満群でのみ不安群の割合が過半数を占めた($\chi^2=13.27$)。独立体制でも養護教諭自身が満足している場合は不安は低い。

次にこの4群で各得点を比較した(Table1)。<養護への援助>では期待度・満足度ともに連携スタイルによる主効果が有意で、養護教諭援助への期待や満足度はSCと協力体制を取っている方が高い。また満足度3得点は、連携満足度の主効果が有意であることより、SCに対する満足度はSCとの連携満足度の影響が大きいことが示唆された。SCの効果のうち<教師援助>では、協力体制が取れているほど、またその連携に満足しているほど養護教諭の評価は高かった。SCとの間で協力体制を作り上げることの重要性が確認された。

Table 1 連携スタイルと連携満足度の組み合わせによる各変数平均得点の比較

連携スタイル→	協力体制		独立		分散分析		
	満足	不満	満足	不満	主効果	交互	
連携満足度→	39人	14人	28人	31人	連携スタイル	満足	作用
期待度 子・親の面接	2.76(.37)	2.66(.44)	2.73(.40)	2.70(.44)	n.s.	n.s.	n.s.
教師・親研修	2.64(.38)	2.31(.49)	2.52(.53)	2.54(.44)	n.s.	n.s.	3.83+
養護への援助	2.89(.29)	2.53(.50)	2.54(.44)	2.56(.56)	5.43*	n.s.	n.s.
満足度 子・親の面接	2.54(.54)	2.03(.69)	2.44(.51)	2.07(.53)	n.s.	15.31**	n.s.
教師・親研修	2.18(.53)	1.69(.40)	2.23(.59)	1.74(.52)	n.s.	19.16**	n.s.
養護への援助	2.73(.44)	2.03(.59)	2.35(.53)	1.64(.46)	15.90**	52.31*	n.s.
SCの教師援助	3.32(.41)	3.10(.42)	3.09(.45)	2.93(.56)	5.07*	3.98*	n.s.
効果 子・親援助	3.32(.48)	3.05(.58)	3.25(.52)	3.19(.39)	n.s.	n.s.	n.s.

SCの問題3得点は主効果・交互作用ともに有意ではなかった。

** : $p < .01$ * : $p < .05$ + : $p < .1$